

皆さま

その 15 をお届けします。

7 月に入り最高気温 20 度をこえる日が続くようになりました。昨年ほど寒くなく、ほっとしています。一日の最低気温は 15 度以下になりますので、極めて快適です。東京は猛暑がやってきたのでしょうか。こちらは涼しくてもうしわけありません。

もうすぐ試験で学生の論文式の採点は大変なハードワークとなります。これが終わって、ほっと私の夏休みになります。ダラム大学の学生は 5 月末に試験を終えて、6 月は終業・卒業関係の食事会やらどんちゃん騒ぎで、9 月末まで休みです。最低 3 か月はゆっくり休みます。学生の取るコマ数も日本より少ないみたいです。60 分授業ですし(日本は 90 分)、授業時間トータルは日本よりかなり少ないように見えます。教授も日本より(時間的には)楽をしています。

最近の日本の大学は暑いさなか、休みは 8 月だけですね。日本の大学生は勉強しないから授業時間数だけは多くしているのかもしれませんが。

増淵文規

## 英国ダラム便り (その 15)

### [英国の財政赤字]

先進国はどこも財政赤字で、問題はその程度です。ダントツのチャンピオンはもちろん日本で、累積債務が GDP の 200% 程度です。累積債務の中身は国によって多少異なりますので、正確な比較はできませんが、英国の場合は GDP の 100%。欧州の大国はこのあたりの数字に収れんしています。100% なら問題ないじゃないかと思うのは日本人だけで、EU のガイドラインは 60% 以下です。英国の場合 2007 年の累積債務(赤字)が GDP の 50% だったのが短期間に倍に膨らんでしまったというのが問題です。2010 年に誕生したキャメロン政権(保守党と自由民主党の連立政権)の最大選挙公約は過剰累積債務の解消でした。そのための手段はどここの国でも、政府支出の削減か税収増しかありません。昨今の景気では税収の自然増は望めず、現政権は 2012 年に付加価値税率(消費税率)を 2.5% アップしました。凄いのは徹底した政府支出の削減です。

2011 年度から 4 年間で国家歳出規模を約 10%削減、各省庁の行政経費は 33%の削減と言う厳しきです。公務員総数を当時の 600 万人から 49 万人削減。この種の歳出削減「案」は日本でもいくらでも出てきますが、守られないし、公務員の削減を掲げれば、お役所は一時的にどこかへ出向させたり、妖しい団体を作ったりしますが、英国の場合は本当に政府予算削減に取り組んでいるように見えます。英国人もやるときはやるなという感じです。

帝京大学として関係が深い省庁に内務省の国境局というところがあります。ヴィザや外国人受け入れの許認可を行う役所です。昨年のことですが申請後長期間認可がおりず、非常に気をもんだことがありました。単純に国境局の書類処理能力の問題でした。全国の教育機関からの申請書類をさばききれず、認可待ち書類が山積みになったというおそまつでした。盛んに新聞報道されましたので事実に近いと思いますが、公務員数削減の影響を最も受けたセクションの一つで、人手の問題でそういう事態になったということです。日本と違ってこういう時他のセクションから応援に行くということはまずないですからね。同じ国境局で昨年よく問題になったのは空港での入国審査の遅れです。長い行列ができました。

ダラムにはダラム県とダラム市の 2 つの地方行政組織があります。地方の政府も予算削減の影響をもろに受けていて、住民から行政サービスにクレームがつくと、「公務員数と地方行政予算の削減」を言い訳にしています。市長も県知事（正式には県行政理事会議長）も日本と違って毎年交代の名誉職的なポストですが、今年の 4 月からは 2 つのポストを一人で兼ねることになってしまいました。主な理由はもちろん経費削減です。景気は決して良くないのに歳出削減（Spending Cut）の手を緩めない。一方これだけ頑張っているのに、景気が悪く税収が伸びないので、累積債務は余り減りません。そこで今年の 6 月に第 2 弾として、2015 年度も追加で歳出削減を行うという発表がありました。

Spending Cut で景気が悪くて大変だという話はどこでも出てきますが、不思議なことに国民の怨嗟の声が強いは思えません。政府債務の削減は必要だという大多数の国民のコンセンサスがあるようです。野党の労働党も Spending Cut に大反対はしません。当地有力紙の The Times に面白い評論がでていました。これ以上の Spending Cut を行っても英国が出血するわけではない。無駄な贅肉を落としているだけで、それが証拠に警官の数を相当減らしたのにもかかわらず、犯罪件数は減っているというような言い方をしています。大きな政府はロクなことは無いというのが英国的、アングロサクソンの思考の底流にある気がします。やはり「市場の見えざる手」のアダムスミスを生んだ国ですからね（彼はスコットランド人ですが）。フランスで Spending Cut が続き、公務員数の本格的削減が実行されるとしたら、多分ゼネスト・抗議の嵐となり、オランダ大統領は退陣でしょうね。

国民生活に重大な影響を与える Spending Cut の発表や補足説明をキャメロン首相がおこなわず、いつも Chancellor (財務大臣) のオズボーンが表に立つのはなかなか理解の難しいところです。その理由を英国人に聞いても彼らには当たり前のことなので、答えは返ってきません。外交問題では外務大臣が表に立つし、首相が何でもかんでも主役になろうとする日本とは様相が異なります。Chancellor と外務大臣は別格で、他の閣僚とでは重さが全然違って見えます。野党による Shadow Cabinet というのもわかりにくい。影の閣僚の活動費の一部は国家支弁されていますし、専用の部屋もあるとのこと。議会主義のお手本の国の制度は、日本と似ているようで、色々と違います。日本でも影の内閣を真似た動きはありましたが、最近はどうなのでしょう。

### [階級意識]

友人が「それでも英国から階級は消えない」という記事を送ってくれました。周りにそれとな

く聞いてみました。勿論制度としての階級はありませんが、階級意識は間違いなく存在します。上流、中流、労働者階級という大きな区分があり、さらに技術系中流階級と言うような細目区分があるようです。金持ちかどうかは関係なく、親の職業が大きな決定要因のようです。多くの方が自分の親は〇〇階級だったが自分は××階級という認識があるようです。だからといってどうということは無いですし、生活パターンが規定されるわけではありません。優・劣等感も余り感じられません。それでも新聞記事に「昔の中流階級と現在の中流階級の生活、趣味嗜好、休暇の過ごし方、買い物の仕方の違い」などという記事が読者に受けるお国柄です。貴族制度はしっかり残っていますし、面白い国です。

2013年7月3日

増淵 文規